

人間—自然関係のより深い認識を

—— レイフイールド『マルクス主義と環境危機』を中心に
島崎 隆

一 問題提起

二〇一一年の三・一一大災害については、地震、津波は基本的に天災であるが、それによって引き起こされた原発事故は基本的に人災であると、私は考えてきた。そしてそれらは、人間—自然関係に亀裂を入れ、結果的に人間の生活を破壊する、一種の自然環境問題となったといえるだろう。原発が、けっして地球温暖化問題に対応する切り札とはならなかったことも、いまや明らかになった*。

*今回の大震災・原発事故と自然観の関係については、拙論「共存・共生型の人間・自然・社会像の模索——地震・津波・原発の大災害に関連して」、共生社会システム学会編『共生社会システム研究』第六号、二〇一二年所収、を参照。

人間にとって自然は利用されるべき環境以外の何ものでもないのであるから、いかに最大限自然を資源として有効利用するか、そのためにいかに自然を効率的に支配するかが、人間の福利にとって重要である…。資本主義ではもちろんのこと、マルクス主義や社会主義を唱えるさいにも、従来、こうした発想が自明の前提であったように思われる。原子力も同様に利用されるべき資源であるが、人類はまだそれをコントロールできる技術を身につけていないので、さらに一層、研究を重ねるべきだというのである。こうした態度は、マルクス主義が近代主義的な人間中心主義を免れていない証拠ではないだろうか。

かつて私は、エコロジー的マルクス主義を主張するライナー・グルントマンの思想を、人間中心主義として批判的に取り扱ったことがある*。グルントマンは、人間が「自然の支配」と「人間中心主義」をむしろ徹底させるところに、資本主義が引き起こす環境問題の解決があるという。したがって彼は、徹底して人間中心主義に依拠するエコロジー的マルクス主義の立場であるといえよう*。以下では、同様の発想のもつ陥穽をデヴィッド・レイフイールド『マルクス主義と環境危機』*のなかに探っていきたい。実はレイフイールドもグルントマンを扱っているが、これらのエコロジー的マルクス主義をどう見たらいいのだろうか。

* Reiner Grundmann, *Marxism and Ecology*, Oxford, 1991. 拙論「環境問題における人間中心主義・自然の支配・技術のあり方」、『環境思想・教育研究』第二号、二〇〇八

年。

*本論では、「人間中心主義」のもとで、大雑把に、世界の中心に人間を置き、他のすべてを人間のために存在するとみなすような立場を意味する。逆に「自然中心主義」のもとで、人間は自然の一部であり、全体的自然のなかで人間も存在しうるとみなす立場を意味する。本論では、この二つの立場を相互に確保しつつも、統一を目ざすという立場を主張する。

*David Layfield, *Marxism and Environmental Crises*, Arena Books, St. Edmunds, UK, 2008. 本書の章立ては以下のものである。第一章「環境はなぜ深刻に考えられるのか」／第二章「社会と自然はなぜ仲違いするのか」／第三章「環境危機にたいする唯物論的アプローチ、マルクス主義的エコロジーからエコロジー的マルクス主義へ」／第四章「エコロジー的マルクス主義 社会と自然のための闘争」／第五章「マルクス主義と環境危機」。本書を引用するさいには、頁数を本論文中に記す。なおレイフィールドは、本書によれば、沖縄の浦添高校の語学教師をしているとのことである。

さて、本書で著者レイフィールドは、マルクス主義政治学の立場から環境問題の考察をおこない、「緑の政治 green politics」とはいかにあるべきかを目ざす。そしてそのさい、エコロジー思想を中心に、多種多様な理論を批判的に検討する。著者は端的に、環境危機の問題について、①なぜいま環境危機が発生しているのか、②なぜ環境危機の出現が不均等であるのか、という二つのことが重要であるという (p. 11)。①は、環境危機の根本原因は一体何なのかという問題であり、のちほど見るように、彼はその根底に資本主義の問題を置く。②は、環境問題がけっして人類に平等に降りかかっているわけではなく、そこにある経済的・社会的格差の問題を直視しなければならないということである。とくに第四章では、グローバル化する国際社会のなかで、資本の活動がいかにこの不平等を引き起こしているのかを詳細に探究する。

この方針は、マルクス主義ならば当然第一に指摘すべきものであろう。本書では、従来のエコロジーでは、経済問題や物質的生産の問題を扱う視点が希薄であり、多くのエコロジーは個人の消費の態度、意識、倫理などを唯一の要因とみなしているといわれる。だが、「マルクス主義の最大の強み」 (p. 180) は、生産の現場を環境問題の発生点として直撃することである。この意味で、「マルクスの資本主義の理論は、われわれのエコロジー危機に何をもたらすことができるのか、マルクス主義は政治的解決の発展にいかにか寄与できるのか」 (p. 2) と提起される。これはおおいに結構な問題意識であると思われる。実際

私も、資本主義的経済体制のなかで利潤追求のための素材ないしリソースとして、自然環境が激しい競争のなかで開発され続けていることが、環境危機の第一要因とみなされるべきだと考えているので、レイフィールドの問題意識にはおおいに賛同したいと思う。他方で私は、レイフィールドの批判の仕方に問題点を感じるので、この点も明らかにしたいと考える。

二 各種エコロジーや環境政策への厳しい批判

では、彼はいかなる批判を、各種のエコロジー思想や環境政策に振り向けるのか。レイフィールドはみずからのマルクス主義的政治学の立場から、環境問題を考えるうえで、アルネ・ネスのディープ・エコロジーのように人間性一般を問題にするのではなく、当該社会の規定的な生産様式である資本主義経済の独自性をきちんと把握すべきだと、繰り返し強調する。さらにまた、環境政策の実施として、強力な国家を期待する「ホップズ主義」の誤りが挙げられたり、環境問題の中心にエントロピー理論を置く立場も批判的に取り扱われる*。

* たしかにエントロピーのみを強調すれば、それは資本主義経済の問題から目をそらせることとなるだろう。だが、エコロジー的マルクス主義者のなかでも、ニコラス・ジョージ・ジェスク＝レーゲンらの熱力学第二法則やエントロピーの問題を、マルクス主義的な立場から位置づけようとする者もある。Paul Burkett, *Ecological Economics: Toward a Red and Green Political Economy*, Haymarket Books, 2009. を参照。なお彼に、Burkett, *Marx and Nature*, St. Martin's Press, New York, 1999. がある。

レイフィールドによれば、総じて「現代のエコロジー」(p. 46) は、環境問題を人口過剰のせいにして、その原因を自己利益を重んずる人間本性そのものに求めたり、また自然からの人間の現代的分離や人間中心主義へのコミットメントに、さらに現代西洋の消費的個人主義や、そもそも西洋文明そのものに、原因を求めたりすることが多い。「だが欠如しているのは、資本主義そのものへの直接的な〔批判的〕取り扱いである。それが個人と文明のあり方を特殊なかたちで形成しているのだ。」(p. 47) さらに本書では、「観念論の強固な流れ」(p. 48) が指摘され、それが、第一に、国家・社会・経済を、もっぱら個人が集合して構成するものとみなし、それらを個人の行動の集合物とみなすという危険な傾向を生み出すとされる。そして第二に、その「観念論」が誤って、エコロジー危機の問題を文化、価値における変化から発生するものとみなしているという。したがって、こ

これらのエコロジーは、資本主義的経済システムなどの「物質的・社会的構造」を軽視する。だから、さきほどの「現代のエコロジー」が西洋的価値観などを問題とすると、この傾向は「観念論的」として批判されることとなるだろう。

マルクス主義的な経済地理学者デヴィッド・ハーヴェイらを援用して、レイフィールドは、環境問題の背景にあるグローバル化を問題とする傾向にたいしては、そもそもなぜ国際社会がグローバル世界へのコントロールを失ったのかが問題であり、やはりそこに、グローバル化を駆り立てる現実的な経済的・政治的な力と構造に批判的に注目すべきであるとされる (p. 62)。その具体的分析を抜きにして、単なる社会的支配の一般的傾向の指摘や、「大きいことは美しい」というイデオロギーへの批判 (シューマッハー、pp. 133ff.) などによっては、環境問題は有効に解明できないのである。ここでは、マレイ・ブクチン、ジョン・クラーク*らの社会エコロジーが批判されているが、さらに、それと関わって、ローカリズムや無政府主義を切り札とする傾向も有効ではないとする。というのも、小さな共同体には、家族的構造による抑圧など、別の意味で大きな問題があり、そもそも社会の規模は最重要の課題ではないからである。

*レイフィールドは誤ってつねに John Clarke と表記する。正しくは John Clark である。

以上のレイフィールドの批判は、おおむね妥当であり、環境問題にたいしても、資本主義的経済システムによる自然環境の破壊・汚染への認識を基盤とする態度は、マルクス主義ならではの積極性をもつといえよう。だが私は、一方では、政治学者であるレイフィールドが、日本などでの研究に比べると、環境問題などに関わらせてその資本主義的経済システムのより詳細な理論的分析をあまりしていないということに物足りなさを感じ*。さらに他方で、環境問題の原因にたいして資本主義のあり方のみを指摘するのは、何か還元主義的偏向を感じざるをえないのである。その点で、自由主義エコロジー、社会エコロジー、ディープ・エコロジー、エコフェミニズム、マルクス主義的エコロジー、生命地域主義、スピリチュアル・エコロジーなど、多様なエコロジーを調べたのちに、私は環境問題の原因の分析に、①経済的発生源、②広義の社会的発生源、③価値的・イデオロギ的発生源、というランクを設けたことがある*。

* マルクス主義経済学の立場から、環境問題を詳細に論じたものとして、Elmar Alltva ter, *Das Ende des Kapitalismus, wie wir ihn kennen. Eine radikale Kapitalismuskritik*, Westfälisches Dampfboot, Münster 2009. がある。

* 拙論「『エコフィロソフィー』の基本課題をめぐって」、『一橋社会科学』第四号、二〇〇八年、二六頁以下参照。

①はもちろん、資本主義や市場経済の問題のレベルである。そして、エコフェミニズムなどが問題とする家父長制などは、②に属するといえるだろう。もっとも現在では、男女平等が建前となっている以上、家父長制や性差別などの問題は、かなり暗黙のシステムへと後退していると見られる。さらに、イデオロギーとしての西洋的価値観や近代以後の自然観は③に属する。さて私見では、因果関係の強さの点で、①→②→③の順に比重が下がるが、同時にこれらの要因は密接につながりあっている。いずれにしても、現代では、自然環境を利潤追求の道具とする競争的経済構造、つまり商品・貨幣社会の全面化としての資本主義体制が、環境問題の最重要の要因であるといえよう。実際、地球規模の環境問題は、生産力の上昇にともない、産業革命以後に徐々に拡大・深化してきたとみなされる。

実際問題として、京都議定書などの方針に従い、各国が何らかのかたちで合意し、その国の経済や産業の構造を変えることができれば（以上の①に該当）、将来的に、地球温暖化問題は大幅に緩和されるだろう。だが、西洋的価値観が悪い、消費的個人主義が悪いといっても、みんな一応頷くかもしれないが、それだけでは、ほとんど何も現実的には変わらないだろう（③に該当）。つまり③は、発想を変えるという点で有益ではあるが、原因として①ほど強力ではない。

三 マルクス主義の基本性格

レイフィールドはみずからのエコロジー的マルクス主義を主張するさいに、デヴィッド・ハーヴェイ、ジェームズ・オコンナー、マーチン・オコンナー、テッド・ベントン、ジョエル・コヴェル、デヴィッド・ペッパーら、多くのエコロジー的なマルクス主義者、社会主義者を引用する。そうした立場に依拠しつつ、各種のエコロジー思想や環境政策を批判したわけである。

では、レイフィールドのマルクス主義観はどういうものか。彼は自分のマルクス主義の立場に関して、「多分このことは、マルクス主義が自然（エコロジー的なもの）を人間社会と人間の物質的必要から区別され、分離されたものとみなすことはできないということを含む」（p. 4）と指摘する。すなわち、自然の問題を考えるさいに、たとえば、フォイエルバッハや自然哲学者がそう考えたように、自然の認識や自然のあり方を、人間社会から切り離して可能と考えることはできないというのである。

より積極的には、レイフィールドは自分の立場を、「マルクス主義を社会理論として構築する」、「マルクスの自然主義からエコロジー中心の倫理 (ecocentric ethic) を発見するような試みではない」 (p. 83) という。つまり彼は、総じてマルクス主義とは、資本主義批判を中心にした、何らかの社会認識と社会批判の実践的理論であり、そこでは (社会実践から分断されたような) 自然哲学が問題とするような自然観の問題などともに扱われるべきではないと考える。こうした態度は、ある意味、かつてのマルクス主義者に共通のものといえよう。そこで、私たちはただちに、マルクスのヘーゲルやフォイエルバッハへの批判を思い起こすだろう。たとえば、『経哲手稿』では、「しかしまた、抽象的にとられた自然自身は、人間から切り離されて固定された自然は、人間にとって無である」* といわれるが、これはまた、現実の人間活動から切り離された自然観への批判として読めるだろう。

* MEGA I, 2, S. 416. 藤野涉訳『経済学・哲学手稿』国民文庫、二三八頁。

だが、本論第五節で指摘するように、マルクスは実践的な人間中心主義の立場からのみ、自然を評価しているわけではないし、マルクスの理論を一種の社会理論だと規定すると、自然をつねに社会の立場から見るといふ、一種の偏向が生まれることとなるだろう。そもそも哲学史的に見ると、唯物論は一般に、なんらかの意味で自然中心主義を意味したとみなされ、唯物論としてのマルクス主義もこの立場を何らかの意味で継承しているはずである。

四 「マルクス主義的エコロジー」と「エコロジー的マルクス主義」の区別

(1) 両者の区別について

以上の構想から、レイフィールドは、「マルクス主義的エコロジー」と「エコロジー的マルクス主義」とを概念的に区別する。この区別は独特であり、ここにレイフィールドの環境問題にたいする立場の独自性が明示される。この区分は、Mathew Humphrey に由来するという (p. 81)。前者は否定されるべき、歪んだ立場であり、後者こそ、レイフィールドが肯定する、正しい立場である。

前者の「マルクス主義的エコロジー」は、私のまとめによると、おおむね以下のような誤った特徴をもつ。

- (1) マルクスの初期著作から、エコロジー中心の倫理的原理を発見しようとする。
- (2) マルクスを原エコロジストとして再読しようとする。

(3) 自然との統一か、それとも自然の支配かということを中心テーマとする疎外論を重視する。

そして以上に共通することがらであり、マルクス主義的エコロジーに反対する理由として、それが「哲学的な存在論、つまり自然とは何であるか、その特徴は何であるかという〔思弁的〕理論を説く」(p. 3)ということが挙げられる。(1)と関連づけると、ネスらに見られたエコロジストたちの「エコロジー中心的な倫理学」こそ、一種の「哲学的存在論」であり、それは人間の社会实践から切り離して自然を論じようとする。とくにそれは、『経済学・哲学草稿』などのマルクスの初期著作の悪用によってなされるのである。(2)との関連では、マルクス自身を、上記の意味での「原エコロジスト」とみなそうとする傾向を生む。のちほどエコマルクス主義者であるフォスターに即して言及するように、これはフォスター自身への批判となるだろう。(3)は趣旨がはっきりしないが、レイフィールドは、「マルクスにとって、資本主義における労働は疎外されていた」(p. 149)などとも表現するので、悪い意味での哲学的疎外論を否定しているようである。

これにたいして、後者の「エコロジー的マルクス主義」とは、「エコロジー危機を理解し、それへの応答を展開するために、マルクスの著作におけるテーマを発展させる試みである」(p. 3)。さらにこの正当化された立場は、「資本主義の拡張的ダイナミズム、およびその危機に直面する傾向を強調し、もっとも重要なこととして、その危機を形成する矛盾をはらんだ階級関係を強調する」(p. 82)。「エコロジー的マルクス主義の再構成の中心にあるものは、資本主義における価値のこの創出、循環、さらに重要なことは価値の蓄積である。」(p. 85) そのさい、資本主義が労働者を生産手段から引き離し、労働者を商品化することなども指摘される(p. 136)。したがって、以上の発想から、マルクス主義は、環境問題をつねに資本の論理と運動によって引き起こされたものとみなし、それとの連関においてのみ、自然の問題を扱うのである。ところが、マルクス主義者の「エコロジー中心的な倫理学」(ドナルド・リー、ハワード・パーソンズら)は、ここから問題をずらし、何か自然哲学的な問題設定をおこなってしまうとされる。

レイフィールドの仮借のない批判は、多くのエコロジストの弱点をついているといわざるをえない。それは彼の現実的な社会分析において有効に示される(pp. 139ff.)。たとえば、生産者が生産から切り離される「略奪 dispossession」の現象について、それが単に資本主義の生成期においておこなわれるのみではなく、経済的グローバル化のなかで、いま現在この「根源的蓄積」の過程が遂行されていることを、レイフィールドは詳細に事

実に即して明らかにする。「生産のための条件」から切り離され、共同体を破壊され、みずからを労働力商品として安価なかたちで売るしか生きる途のない人々の土地を奪い、マングローブの破壊のなかで小エビの養殖場をつくる場合や（エクアドル、ホンジュラス、タイ、インドネシアなど）、アメリカの木材販売をおこなう企業の進出のなかで、森林破壊と労働者の生活破壊がともにおこなわれるなかで、賃金切り下げと闘う人々の場合などを列挙して、レイフィールドは、そこでいかに人々の生活の破壊と自然の破壊が同時並行的に進むのかを明らかにする。そして彼は、世界社会フォーラムの活動など、労働者と民衆の闘いの状況に注目する。ここにエコマルクス主義のリアルな事実認識があるといえよう。

（2）両者の区別の問題点

レイフィールドは「マルクスのアプローチはエコロジー的というよりも、社会的であった」（p.105）と結論する。だが、「エコロジー的」と「社会的」は対立するのだろうか。レイフィールドの引用するマレイ・ブクチンらの立場は、まさに「社会エコロジー」と名づけられており、マルクスもこの立場だとされることもないわけではない。エコロジーを唱える立場として、レイフィールドによって「観念論的」といわれる立場がしばしばあるのが事実だとしても、エコロジーが全体として排斥される必要は見当たらないのではないか。実際、レイフィールドは「エコロジー的マルクス主義」という名称を、積極的に使用しているのである。いずれにせよ、「エコロジー的マルクス主義」は「マルクスの社会理論を再構築する試み」であって、「マルクスの自然主義からエコロジー中心の倫理学を再発見する試み」（p.83）ではないと断定される。

だがそれでも、彼の批判は、何か一面的かつ狭隘なように見える。彼はハーヴェイを引用する。「マルクスの世界観の基礎には、人間の欲求と必要を満足させるために、自然の獲得をするという構想が存在する。」（p.106）この事実を踏まえれば、それ以上、マルクスの著作から「エコロジー中心の倫理学」を発見する必要はなく、それ以上深入りすると、それはおのずと「神秘的自然主義」に陥るだけである…。だが、なぜ人間が労働をしなければならないのかと問えば、人間も一種の自然物として、自然なしには生きられない存在だからだとなるだろう。この意味で、マルクスが『経哲手稿』で指摘するように、人間は「動物や植物がそうであるように、ひとつの受苦的な、条件付けられた、制限された存在である」*。ここには、自然物としての人間の絶対的受動性があり、そこからの転

回としてしか、人間の能動性はありません。

* MEGA I, 2, S. 408. 前掲『経哲手稿』二二二頁。

そして、レイフィールドは、初期のマルクスを強調して彼を「エコロジスト」とみなすドナルド・リーを槍玉にあげるが (pp. 87f.)、だが、こうした段階での研究はある意味すでに過去のものとなっている*。とくにエコロジーとマルクスの関連でいえば、アルフレート・シュミットらによって、マルクスが単に初期にとどまらず、つねに自然問題に関心をもっていたことも明らかになった*。シュミットは、マルクスの自然概念をエコロジーや環境問題とつなげて展開しているわけではないが、マルクスの構想のなかから、「自然の社会的媒介」と「社会の自然的媒介」という二つの立場の統一というアイデアを取り出している。前者は自然（観）が社会のなかで形成されてきていること、後者は社会が自然の発展過程のなかに埋め込まれていること、を示している。この両側面をきちんと理解することが重要であって、レイフィールドには、ある意味「社会の自然的媒介」の側面が欠如している。

* ちなみに、エコロジー的マルクス主義の発展は、劉によって、①リース、ベン、②オコンナー、③フォスター、バーケットの三段階に区分されている。ここで、フォスターはバーケットとともに高く評価されている。劉仁勝「マルクス・エンゲルスとエコロジー」、東京唯物論研究会編『唯物論』第八二号、二〇〇八年。

* アルフレート・シュミット『マルクスの自然概念』（元浜清海訳）法政大学出版局、一九七一年。この点で、拙著『エコマルクス主義』知泉書館、二〇〇七年、六四頁以下に詳細なシュミット評価がある。

ところで、レイフィールドは奇妙なことに、上記の「マルクス主義エコロジー」の登場が、マルクスにたいするエコロジーからの批判への反応であることを、自分自身了解しているという (p. 84)。そこでのマルクスにたいする批判点をレイフィールドは列挙する。

- (1) マルクスは自然にたいして、まったく道具主義的なアプローチをとっている。
- (2) マルクスは進歩的なテクノロジーに固執する。
- (3) マルクスは自然について、人間がそれにたいして闘わなければならない、厳しい領域とみなしている。

以上のマルクス批判は、それが正当か否かは別として、しばしば指摘されてきたものである。レイフィールドは従来のマルクス主義的エコロジーなどが、これらの批判への対応として出現したと指摘する。だが、この立場が環境問題の社会的分析をおこなわずに、何

かエコロジー中心な倫理学に随しているとして批判するわけである。だがそうであるとしても、マルクスへのこうした批判に正面から答えなくていいのだろうか。レイフィールドはあたかも、本来の「エコロジー的マルクス主義」は非現実的に見える倫理問題などは相手にしないので、この種の哲学的問題をまともに考えるのは敵の術中に陥るとでも考えているようである。彼はどこでも、こうした哲学的問題に答えていない。いずれにせよ、マルクスを哲学の分野から切り離してしまった以上、(哲学的な深さをもった) 原理的な問題には、レイフィールドは深入りしないのである。そこには、彼が政治学者であるという側面も関わっているだろう。

五 人間—自然関係の問題点

以上において、私はレイフィールドにたいしていくつかの疑問点を呈しながらも、真正面からの批判を留保してきた。以下では、レイフィールドへの批判の基本点を明示したい。根本問題は、第三節で述べられたように、「多分このことは、マルクス主義が自然(エコロジー的なもの)を人間社会と人間の物質的必要から区別され、分離されたものとみなすことはできないということを含む」(p.4)という箇所であり、端的に言って、「マルクス主義を社会理論として構築する」といわれるような指摘である。

自然問題を社会のなかで考えるという立場を社会中心主義として、人間中心主義の代わりに打ち出したとしても、やはり社会のなかでの自然の位置づけがあらたに問われることとなる。やはり自然中心主義の立場は、そこで克服はされないであろう。現代のエコロジー危機の問題を深刻に受け止めた場合、この立場はいまや不十分なものとなり、各種のエコロジーの問題意識もまともに理解できず、それらの問題意識を止揚することも不可能となるであろう。私がレイフィールドの「エコロジー的マルクス主義」を狭隘だとか「還元主義的」と呼んだのは、そういう問題意識からである。実はこの立場は、おのずとマルクス主義を近代主義的な人間中心主義に帰着させてしまうであろう。

ところで、私は従来から、マルクス主義が人間—人間関係、つまり社会関係を基本としつつも、そこに改めて人間—自然関係が不可欠なものとして付加されなければならない、マルクス主義が独自の自然観を確立することによって、環境問題の基本的認識が形成されると詳細に述べてきた*。その段階において真のエコロジー的マルクス主義が成立するわけであり、実はマルクス自身が(エンゲルスとともに)こうしたエコロジー的マルクス主義の立場に立っていたということも明らかにしてきた。マルクス自身も、地質学的・生物学

的進化論を基盤に、人間をも産出して運動する大自然を基盤として、さらに人間がその自然のうえに立って、自然を素材として労働することによってはじめて生活できるということを主張してきた。以上の構想は、ある意味自然中心主義の側面を描く*。その構想は、労働のひとつの側面として、「人間と自然のあいだの物質代謝(Stoffwechsel)」を指摘するところに明示される。マルクスの理解する労働とは、道具や機械を媒介とした目的実現活動という主体的側面をもつとともに、別の客体的側面をもつ。明らかに、「人間と自然のあいだの物質代謝」は、人間社会と自然的環境のあいだの、労働を媒介としたエネルギーと物質の客観的な自然的循環を意味する*。だからマルクスは、単純な人間中心主義や社会中心主義の立場ではなく、その基礎にしっかりと自然中心主義の立場をもっているといえよう。エコロジーが重視するのは、この客体的側面である。もちろんマルクスは、レイフィールドが強調するように、資本主義体制を中心に社会批判、社会認識を中心に考えていたことは疑いないが、それが豊かな自然観、人間—自然関係の深い唯物論的認識を不可欠の条件とすることも見ていた。マルクスはこの二つの立場の相互浸透的な統一をさまざまなかたちで述べているが、『資本論』における一例を挙げよう。

* かつて私は、マルクスの自然中心主義の側面と人間中心主義の側面をそれぞれ取り出し、その統一のあり方を探った。拙著『エコマルクス主義』晃洋書房、二〇〇七年、一六七頁以下。本論で展開されるマルクスの考察については、拙著で詳細に転回したので、参照されたい。

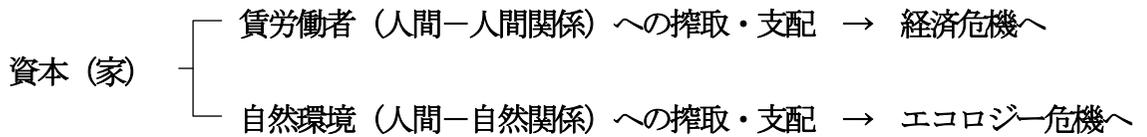
* 「人間と自然のあいだの物質代謝(Stoffwechsel)」については、拙著『エコマルクス主義』、八五頁以下に詳しい。

マルクスは、「資本主義農業のどんな進歩も労働者から略奪する (berauben) ための技術の進歩であるだけでなく、土地から略奪する (berauben) ための技術の進歩でもある」

* と述べた。かつて私は、この認識を以下のように図式化した*。

* MEW23, S. 529. マルクス= エンゲルス全集刊行委員会訳『資本論』①、大月書店、六五七頁。

* 拙論「エコロジー 論争から共同的对話へ」、嶋崎隆編『地球環境の未来を創造する レスターブラウンとの対話』旬報社、二〇一〇年、一七四頁参照。続いて、同書の一八七頁の、発展的図式も参照されたい。ここでは、人間 (男性となる) と自然のあいだの中間的存在 (女性、子ども、非白人、先住民、農民 → 高等動物) が考慮されており、グローバル世界の搾取と略奪の構造が描かれる。



すなわちマルクスは、単に資本 (家) が賃労働者を「略奪する」、つまり支配・搾取するのみではなく、同時並行的・相互浸透的に、自然環境も「略奪する *berauben* 」と指摘する。そして、労働者への搾取の構造からは経済的な危機が訪れ、自然環境への搾取のメカニズムからは環境悪化のエコロジー危機が訪れる。現代日本でいえば、前者の側面では、労働分配率の確実な低下によって国民の生活はますます悪化し、大企業の内部留保はウナギのぼりになり、後者の側面では、温室効果ガスの発生による地球温暖化現象などが止まらずに進行している。原発事故で例示すると、原発利益共同体のために原発労働者や国民全体が搾取され、他方、放射性物質の拡散によって生活環境や食べ物が汚染されているという状況である。そしてこの二側面は、基本的には、唯一資本の活動によって引き起こされているといえよう。

ところで、もしレイフィールドのような人間中心主義者 (社会中心主義者) がこの箇所を厳密に読めば、自然を「略奪する」ということはありえないということになるのではないだろうか。本来人間は、自然を人間自身の必要のために効率的に利用するものであるから、自然は当然にもおおいにできるかぎり略奪されるべき (支配されるべき) ものであろう。自然を遠慮なく徹底利用するのが人間の立場である以上、自然にたいして「略奪する」というような表現は不適切であろう。ところが、マルクスは、資本による「地力の搾取や濫費 *Exploitation und Vergeudung der Bodoenkräfte*」* などという表現も使う。つまり人間-自然関係の労働において、資本主義農業が、価値形成のために「地力」(自然)を容赦なく搾取し、荒廃させるということが、マルクスの主張である。したがって、人間にたいしてのみではなく、自然にたいしても「搾取」というような言語表現が使われたのである。

* MEW25, S. 820. 同上『資本論』⑤、一〇四〇頁。

こうしてマルクスは、社会関係を基本としつつも、それと自然関係をともに重視するという複眼的視野をもっていたといえよう。

六 自然弁証法の問題とフォスターへの評価

そうすると、マルクス自身も認めたが、エンゲルスの自然の弁証法の立場が自然中心主義の主張において、重要な役割を果たすことだろう。というのも、自然弁証法は、自然の進化・発展や自然世界の構造的認識を自然科学や社会の発展と関係させて論ずるからである。ところが、レイフィールドは、この自然弁証法に懐疑的なのである。だがそれでも、その理由をはっきりしない。彼はおおむね次の二つの指摘をする (p. 96)。

(1) 自然弁証法は、自然というひとつの实在性のなかでの弁証法的活動性を示唆するが、こうしてそれは、そもそも静観的唯物論 (contemplative materialism) や存在論 (ontology) になるにいたる。

(2) 自然弁証法は、環境危機の社会的起源に何も付加しない。

(1)に関して。普通、自然弁証法などのエンゲルスの哲学が批判される背景には、それがマルクス・レーニン主義やスターリン主義の哲学的基礎として使われたという事実があるが、不思議にも、レイフィールドはそうした批判 (「適用説」の誤りといわれる) はおこなわないようである。だが、(1)の批判は、この視点から、正確に基礎づけられるだろう。(1)は従来の観念論的な哲学としての自然哲学や存在論の仲間として、エンゲルスの自然弁証法を指摘することを意味する。この点でいうと、たしかにエンゲルスの自然弁証法には奇妙な叙述がないわけではないが、全体として、一八世紀や一九世紀の自然科学の発展を総括しつつ、弁証法的自然観を天才的に打ち出している。こうして、エンゲルスによる一九世紀の自然科学の総括は、自然が全体としてダイナミックな発展過程にあり、それぞれの自然的分野が相互に作用し合っていることを明らかにしたわけである。自然自体も自然科学も、ともにダイナミックに発展してきたわけであるから、「静観的」であるはずはないだろう。問題は、さきに述べたように、自然弁証法を何か一種の独断的宇宙論のようなものとして、弁証法的論理学の世界観と癒着させてマルクス主義哲学体系の先頭に立てて正当化したことだろう。したがって、自然弁証法を史的唯物論の見地から、エンゲルスに見られた科学主義や実証主義のスタイルを批判しつつ、それがいかにして成立したのかの哲学的基礎づけがおこなわれなければならないが、それは可能といえよう。

(2)についていえば、自然弁証法をまったく自然世界の話に限定されれば、当然社会問題とは関わらないだろう。だが、エンゲルスは人間-自然関係のことも議論している。自然弁証法が自然だけの話に限定されるはずはない。たとえば、エンゲルスは『自然弁証法』の草稿で、人間がそこに働く複雑な因果関係を認識できずに自然を開発しつつ行くと、思

わぬかたちで「自然は私たちに復讐する」と指摘する*。さらにエンゲルスは、歴史的にメソポタミア、ギリシャ、小アジアなどの地域を出す。そこでは耕地獲得のために森林を伐採し、かえって自分たちの生活基盤を掘り崩したのである。地球温暖化問題、エイズウイルス、BSE、ダイオキシンなどの被害も、まさに人類の経済活動がみずから思わぬかたちで招いた、「自然からの復讐」といえないこともない。

* 寺沢恒信訳『自然弁証法』(1)、国民文庫訳、二二三頁以下。

そしてこのさい、レイフィールドによると、ハワード・パーソンズやジョン・ベラミー・フォスターがこのエンゲルスの自然弁証法に依拠していると非難される。「より現代的な理論が、さらにまた自然弁証法に強く依拠しているが、それはジョン・ベラミー＝フォスター〔正しくはジョン・ベラミー・フォスター〕によって提供される。」(p.96)* 以下とくにフォスターに即してレイフィールドの議論を吟味しよう。レイフィールドはフォスターを「マルクス主義的エコロジー」の代表者の一人とみなしているようであり、そして彼がエンゲルスの自然弁証法に依拠している点を問題にしている(p.96)。そして、その内容上の批判点はすでに言及した通りである。そしてたしかに、フォスターはマルクスを一種のエコロジストとみなしているが、だが、彼ですら『破壊されゆく地球』(一九九四年出版)*を書いたころは、マルクスのエコロジーはまだ二次的なものにすぎないと思っていたのであり、マルクスのエコロジーの成立可能性に思いいたったのは、それ以後の深い研究によってである*。

* 渡辺景子訳『破壊されゆく地球 エコロジーの経済史』こぶし書房、二〇〇一年。

* John Bellamy Foster, *Marx's Ecology: Materialism and Nature*, New York, 2000.
渡辺景子訳『マルクスのエコロジー』こぶし書房、二〇〇四年、八頁以下の述懐を参照。

とくにレイフィールドがフォスターに批判的な箇所を引用してみよう。「'エコロジカル'と見られることのできるようないかなる洞察も、そのときこの〔マルクスの〕社会的プロジェクトにたいしては周辺的であるだろう。ベラミー＝フォスター〔正しくはベラミー・フォスター〕によって提唱された自然主義は、この枠組みを転倒させるように見える。マルクスがエコロジー的な理論家であったことを証明するさいに、彼は社会的な理論化を、科学的唯物論へのマルクスの外見上の関係に従属させるのである。」(p.100)レイフィールドによれば、すべてはマルクスの政治経済学の認識のなかで把握しなおされるべきであり、エコロジーに必要な自然科学的知見ですら、そうされなければならないというのであろう。そしてフォスターが物質代謝や人間・自然観の亀裂、人間からの自然の疎

外などについてのマルクスの叙述を出したとしても、けっしてマルクスがエコロジストであるという証拠にはならないとされる (p. 103)。そしてレイフィールドは、「マルクスのアプローチはエコロジー的であるというより社会的であった」 (p. 105) と断言するのである。

あくまでも社会批判の見地とエコロジーの見地を背反させようとするのがレイフィールドの立場のようであるが、そうすると、レイフィールドにとって「エコロジー」とは何かという定義が問題となるだろう。だが彼は、そもそもエコロジーとは何かを定義していないと思われる。もしエコロジーが例の抽象的な「エコロジー中心の倫理学」でしかありえないのであるならば、たしかにマルクスはエコロジストであるというわけにはいかない。だがそれは、フォスターも承知していないことがらである。すでに述べたように、「社会エコロジー」という用語もあるのであって、社会批判とエコロジーはかならずしも対立するわけではない。エコロジー的フェミニズムもかなり社会的であって、同時にそれは一種のエコロジーなのである。ちなみに、フォスターの『破壊されゆく地球』でも『マルクスのエコロジー』でも、そこでの資本主義的な経済や産業への批判的見地はつねに十分に見られるのであって、彼がマルクス主義的批判を逸脱しているわけではない。

ちなみに、レイフィールドはエコロジー的マルクス主義者のポール・バーケットを肯定的に引用している (pp. 120ff.)。ところが、このバーケットはフォスターの強固な盟友であって、私が詳細に紹介・検討したように、「エコロジー的マルクス主義」を代表して、彼らは社会エコロジーのジョン・クラークやエコロジー的フェミニズムのアリエル・サレーと激しい論争を続けてきたのである*。これは一九八九年以来アメリカの雑誌『組織と環境』で続けられてきたのであって、英語圏出身のレイフィールドがこうした状況を把握していないとは信じられないことである。バーケットを肯定し、フォスターを批判するということは、矛盾以外のものではない。

* 前掲拙著『エコマルクス主義』、第Ⅱ部「『自然は人間の非有機的身体である』をめぐる論争」を参照。

周知のように、実はマルクス自身に、従来の人間中心主義や自然中心主義と意味は少しずれるが、「人間主義と自然主義の統一」という構想がある。たとえば、マルクスは『経哲手稿』で、到達目標としての共産主義を、「貫徹された自然主義として、=人間主義であり、逆に貫徹された人間主義として、=自然主義である」*と規定したのであった。こうした雄大な構想は、単に人間の歴史と社会にすべてを還元するのではない、ある意味で

人間中心主義と自然中心主義の統一をどう深刻に受け止めるかという課題を正当化するものであるだろう。

* 前掲藤野訳『経哲手稿』、一四六頁。なおレイフィールドはこの文章の英訳を引用しているが (p. 91)、こうした哲学的含蓄に富んだ文章の意味が受け止められないようだ。

以上のようにして、レイフィールドは「エコロジー的マルクス主義」の現実分析の優位性を説得的に主張し、「エコロジー中心的な倫理学」の問題点を指摘しえたと思われる。だがそれでも、彼は、マルクスの自然（中心）主義と人間（中心）主義の統一の構想を見逃し、「エコロジー的マルクス主義」をもっぱら、社会と人間実践の側からとらえてしまい、彼のいう「マルクス主義的エコロジー」や、現代でいう「環境倫理」やその他のエコロジーの主張を批判的にしか受け止めなかったのである。そして、レイフィールドの主張の問題点は、けっしてマルクス主義者に特有なものではなく、その近代主義的な人間中心主義は、現代人に広く見られるものでもあろう。レイフィールドをとくに取り上げた理由もそこにあった。